

1. 単元づくりについて

本校社会科で力を入れている点が2つある。

- ① 自分事として学ぶ場の工夫
- ② 社会的事象の見方・考え方をういた試行錯誤の場の工夫

①自分事として学ぶ場の工夫

社会問題を身近な問題としてとらえ、自分事として学ぶことができるようにするために、「つかむ段階」で社会的事象を提示し、気付きや疑問を話し合い、自分事として捉える活動を行う。例えば、4年生の「命とくらしをささえる水」の単元では、まず、嘉瀬川ダムの貯水量が減っている写真を提示する。ダムに対するこれまでのイメージとの違いに焦点を当てることで、水に対する興味・関心が高まると考える。次に、現在の貯水率が20%を下回っている事実を伝え、それに対する気付きや疑問を基に、水に関わるイメージマップとしてつないでいく。その過程で、「水道と自分との関わり」「水道事業が自分たちの生活の中で果たす役割」「貯水量不足が引き起こす問題」「水道の安定供給のために自分にできること」など、水道事業に関する様々な事象の関連について意識したり、水道事業に関する社会問題に気付いたりすることができる。また、作成したイメージマップを基に学習の見通しをもつことも重要となる。解決すべき問題点は何か、解決のために「何を」「どのように」調べるのか、調べて分かったことや考えたことを「どのようにまとめるのか」「誰(どこ)に提案するのか」などについて、児童の意見を基に学習計画を立てるようにする。そうすることで、児童がゴールを意識して学習に臨んだり、自主学習等で情報を集めたりするなど主体的な学習につなげることができる。

このように、単元の「つかむ段階」数時間を使い、児童の発言を基に学習を進めていくことで、最初に資料を見たときは漠然としていたことが、整理する過程において何が問題なのか明らかになり、解決の道筋が見え始める。そのことにより、今まで考えたことがなかった社会問題を自分事の問題としてとらえ、その解決に向けて自分にできることは何かを考えながら学びを展開していくことにつながっていく。

③ 社会的事象の見方・考え方をういた試行錯誤の場の工夫

社会問題を解決するために調べたり考えたりしてきたところで、試行錯誤の場を設定する。試行錯誤の場とは、「AかBか」「Cをするために優先するべきことは何か」など、論題を基に議論する場とする。

例えば、5年生の学習において、児童の「有明海を元気な海にしたい」という思いから、その実現のために必要なことは何かを調べたり考えたりしていく過程で「有明海を再生するために優先すべき事業は何か」と、より具体的な論題を児童とともに設定して議論を行う。また、議論の場では児童の思いを大切にしながらも、『「持続可能性」』『「連携」』の見方で『総合する』考え方をういてほしい』教師の意図が働く。そのためには、社会的事象の見方・考え方の提示による議論の方向付け、発言への価値付け、板書による思考の可視化や議論の整理など、教師がコーディネートしながら議論を進めることが重要となる。

このように、社会的事象の見方・考え方をういて議論することで、多面的・多角的な考察を行ったり、自分の考えを修正したりするなど、よりよい選択・判断ができる力を育てていくことができる。

2. 発問について

本校社会科では、方向付けたい学びに対して次のような発問をするように意識している。

発問	方向付けたい学び
どのように(な)～だろう	事象に見られる事実を調べる
	事象の傾向、特色を考える
なぜ～なのだろう	事象の背景や意図を考える
どうしたらよいだろう	解決に向けた選択や判断をする

3. 単元づくりの一例

(1) 単元名「わたしたちのくらしとごみ～未来のために！ごみ減らし大作戦～」

(対象:第4学年 児童数:35名 実施時期:令和元年6月)

(2) 単元の意図について

「持続可能な社会」を目指すと言われて久しいが、その実現のために、ごみ問題を身近なものとしてとらえ、よりよい暮らしのために自分に何ができるのかを考えることは、社会の一員としての自覚を育むうえで意義のあることと考える。本単元では、佐賀市の廃棄物処理の仕組みや人々の努力や工夫などに着目して調べる活動を通して、廃棄物処理事業が生活環境の維持と向上に役立っていることを理解し、ごみ減量のために何が必要かを考えるようにする。

指導にあたっては、児童が主体的に学習に臨めるように、まず「つかむ段階」で、現実の社会問題に関わる事実に対する気付きや疑問を基に学習計画を作る。次に「調べる段階」で、ごみの現状や佐賀市の取り組みについて調べる。そして「高める段階」で、「ごみ減量対策として佐賀市が優先すべき取り組みは何か」について議論し、望ましい解決策について選択・判断していく。最後に「広げる段階」で、意見文を書いたり新聞にまとめたりして、家族や佐賀市民などに伝える活動を行う。

このような学習を行うことで、自分事として社会的問題解決を実践する力を育むことができると考え、本単元を設定した。

(3) 単元の指導について

段階	時	主な学習活動	主な教師の働きかけ(○)と評価規準(◆)										
つかむ	1	・佐賀市のごみ処理費用の事実を知り、気付きや疑問などについて話し合う。	○児童に興味をもたせるために「年間 33 億円」という事実を伝え、疑問や気付きをつなぎイメージマップとして表す。そうすることで、水道事業の関連を意識したり、水道事業に関する社会問題に気付いたりできるよう支援する。 ○児童の意見を基に、学習計画を立てる。 ○最終的な自分の考えに対する評価指標として、「根拠の明確さ」と「社会的事象の見方」を観点としたルーブリックを提示する。それぞれ点数化して示し、学習過程で大事にしてほしいことを児童に伝えていく。 ◆ごみの現状について問題意識をもち、意欲的に学習計画を立てようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】										
	2	・イメージマップを基に、学習計画をたて、パフォーマンス課題を設定する。											
	3	大量のごみがどのようにして処理されているか調べ、ごみを減らすためにどうすればいいか考え、家族や佐賀市民に伝えよう。											
		<table><tr><th></th><th>根拠の明確さ</th><th>社会的事象の見方 (効果・効率・働く人の思い・費用・取り組みやすさなど)</th></tr><tr><td>3</td><td>資料をもとにしている</td><td>社会的事象の見方が3つ以上</td></tr><tr><td>2</td><td>自分の経験や家の人の話をもとにしている</td><td>社会的事象の見方が2つ</td></tr><tr><td>1</td><td>根拠が曖昧</td><td>社会的事象の見方が1つ以下</td></tr></table>			根拠の明確さ	社会的事象の見方 (効果・効率・働く人の思い・費用・取り組みやすさなど)	3	資料をもとにしている	社会的事象の見方が3つ以上	2	自分の経験や家の人の話をもとにしている	社会的事象の見方が2つ	1
	根拠の明確さ	社会的事象の見方 (効果・効率・働く人の思い・費用・取り組みやすさなど)											
3	資料をもとにしている	社会的事象の見方が3つ以上											
2	自分の経験や家の人の話をもとにしている	社会的事象の見方が2つ											
1	根拠が曖昧	社会的事象の見方が1つ以下											
調べる	4	・佐賀市のごみの現状について調べる。	○主に教科書の資料を使って調べ活動を行う。佐賀市役所作成の資料を用意したり、清掃工場の見学を設定したりするなど、児童の学習計画に沿えるよう支援する。 ◆毎日のくらしから出されるごみがどのように集められ、処理されているか調べ、清掃工場などで働く人の努力や工夫について理解することができる。【知識・技能】										
	5	【資料】ごみ排出量と中身											
	6	ごみの分別と収集の仕組み											
	7	最終処分場の様子 【現地調査】佐賀市清掃工場の見学											
	8	・ごみ減量に向けた佐賀市の取り組みについて調べ、整理する。	○佐賀市の取り組みについて整理するため、関連や効果を考えさせる。 ○市民のごみに対する意識を知るために、保護者アンケートの結果を提示する。 ◆佐賀市の取り組みや市民の意識について理解することができる【知識・技能】										
	9	・保護者アンケートを分析する。											
高める	1	・ごみ減量のために佐賀市が優先して取り組むことを考える(個人、グループ)。	○議論に向けて、自分が勧めたいと思う取り組みの効果について整理させる。 ○複数の立場から検討することを通して、効果的な取り組みを選択・判断させる。 ◆理由を明らかにして自分の考えを説明し、他者の考えと比較、関連付けをしながら選択・判断をすることができる。【思考・判断・表現】										
	11	・ごみ減量のために佐賀市が優先すべきことは何かについて議論する。											
	2												
広げる	1	・学習のまとめとして「佐賀新聞への投書」を書く。	○調べたことや議論の内容をふり返らせ、自分の考えを提案するために意見文を書かせる。 ◆ごみ減量の必要性を伝えるための意見文を書くことができる。【思考・判断・表現】										
	3												

① 社会的現象との出合わせ方の工夫

社会問題を自分事として捉えるためには、それに対する興味関心を強くもつことが必要である。そこで、1時目で「年間33億円」という社会問題に関わる事実を提示した。莫大な金額だと感じるが、何の費用か知っている児童はいなかった。自由に予想させた後で、数字の意味を明らかにし、気付きや疑問を出させた。



図1 児童の気付きや疑問を基にしたイメージマップ

児童からは、ごみの現状に関するものだけでなく「市民は知っているのか」「なぜこんなに高いのか」「なぜこんなに高いのか」「なぜこんなに高いのか」「なぜこんなに高いのか」など、社会問題やその解決の必要性につながる発言が出された(図1)。

授業後の振り返りにも、「ごみの処理にこれだけ多額のお金がかかっているのは問題なのではないか」「どうにかしてごみを減らさなければ」「これからごみをあまり出さないようにしたい」と記述している児童が多く見られた。つまり、本時の学習で、今まで意識していなかった「ごみに関する社会問題」を身近な問題としてとらえ、「自分にできることは何か」「自分も何かしなければ」と自分事として考えようとし始めたといえる。

② 児童の意見を取り入れた学習計画づくり

児童が見通しをもち、自分事として学習に臨むためには、児童の疑問や予想を大切にしながら学習計画を立てていく必要がある。そこで、2時目に、前時のイメージマップを整理する活動を行った。児童は、前時の学習において「ごみを減らしたい」という思いを強くもちつつも、「なぜこんなに処理費用がかかるのか」「どれだけのごみが出ているのか」ということも発言していた。そこで、そのことについて疑問に思うことを改めて尋ね、まずはごみ処理の現状を調べることから始めることとした。次に、今後もごみが増える予想があることに対しての思いを尋ねた。児童からは、「お金がかかる」「処分する土地が必要になる」「環境に悪い」などから困るという意見が出され、「ごみを減らさなければいけない」という思いや、ごみを減らす必要性についての共通理解を行った。その後、「すでに3Rやエコバッグ持参などの取り組みが行われていて、頭で分かっているのに」「ごみが減らないのはなぜか」と揺さぶりをかけ、佐賀市民の意識にも目を向けさせた。これらのことから、ごみを減らすためにどうすればよいか考えていくこととした。最後に、調べたことや考えた内容とごみ減量をどのようにつなげるのか尋ねたところ、家族や佐賀市民など多くの人に伝えたいという意見がほとんどであった。中には、市役所や県庁の人に伝えたり、チラシやポスターを作って佐賀新聞に載せ、より多くの佐賀市民に広めたりしたいという意見もあった。ただ、費用の面もあるので、新聞に関しては投書で意見を伝えることができることを提示した。最

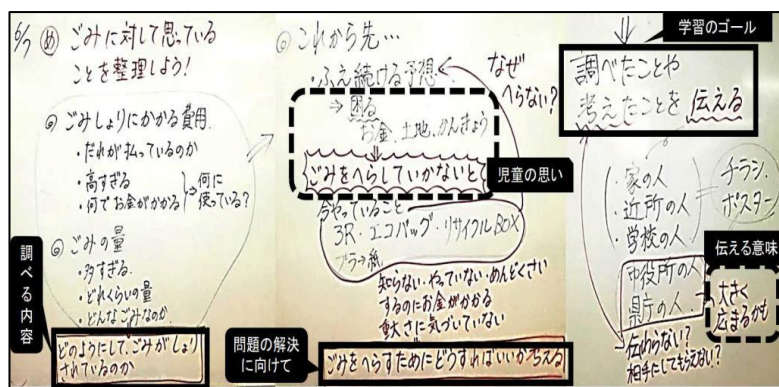


図2 学習計画づくりの流れ

児童の見通しをもち、自分事として学習に臨むためには、児童の疑問や予想を大切にしながら学習計画を立てていく必要がある。そこで、2時目に、前時のイメージマップを整理する活動を行った。児童は、前時の学習において「ごみを減らしたい」という思いを強くもちつつも、「なぜこんなに処理費用がかかるのか」「どれだけのごみが出ているのか」ということも発言していた。そこで、そのことについて疑問に思うことを改めて尋ね、まずはごみ処理の現状を調べることから始めることとした。次に、今後もごみが増える予想があることに対しての思いを尋ねた。児童からは、「お金がかかる」「処分する土地が必要になる」「環境に悪い」などから困るという意見が出され、「ごみを減らさなければいけない」という思いや、ごみを減らす必要性についての共通理解を行った。その後、「すでに3Rやエコバッグ持参などの取り組みが行われていて、頭で分かっているのに」「ごみが減らないのはなぜか」と揺さぶりをかけ、佐賀市民の意識にも目を向けさせた。これらのことから、ごみを減らすためにどうすればよいか考えていくこととした。最後に、調べたことや考えた内容とごみ減量をどのようにつなげるのか尋ねたところ、家族や佐賀市民など多くの人に伝えたいという意見がほとんどであった。中には、市役所や県庁の人に伝えたり、チラシやポスターを作って佐賀新聞に載せ、より多くの佐賀市民に広めたりしたいという意見もあった。ただ、費用の面もあるので、新聞に関しては投書で意見を伝えることができることを提示した。最

最終的に、佐賀市民に広く伝えていくことが大事という話し合いになり、本単元のゴールを「調べたことや考えたことを伝える」という活動に設定した(前頁図2)。さらに、3時目において、自分一人の行動だけでなく、多くの佐賀市民にやってもらうことが大事になることを再確認し、パフォーマンス課題を設定した。

このように、「つかむ段階」において児童の発言を基に学習を進めたことで、事実を知った時に漠然としていたものが整理され、学習の見通しをもつことができた。つまり、今まで考えたことがなかった社会問題を自分事の問題としてとらえ、問題の解決に向けて自分にできることは何かを考えながら学びを展開しようとする意欲へとつながったといえる。

③ 社会的事象の見方・考え方をういた試行錯誤の場の工夫の実際とその考察

ア 児童が自分事として選択・判断できる論題の設定と議論までの流れ

児童が自分事として選択・判断できるようにするためには、学習の流れの中で必然性のある論題と議論の場を設定することが必要である。

児童は、調べ学習を通してごみ処理の現状を知り、「どうにかしなければ」という思いが高まった。

そこで、8時目から、ごみを減らすための方策を考えることとした。具体的な手立ては以下の通りである。まず、佐賀市の現在の取り組みについて整理した。佐賀市の取り組み(図3点線囲み)からスタートし、「そうすることでどうなる」と関連を考えながら次につなげていく(図3実線囲み)。工夫・働く人の思い・継続性・費用などの社会的事象の見方を働かせながらつなぐように促したことで、効果を可視化することができた。次に、整理されたものを見ながら「多くの取り組みがなされているが、どの取り組みを家族や佐賀市民に勧めていくか」と尋ねた。調べ活動の資料として渡していた保護者アンケートの結果から、約半数が佐賀市の取り組みを知らないことや、知っていても面倒に感じていることが分かっていたので、「どれも大事だが、何か1つをしっかりと取り組んでもらうのがいいのでは」という話し合いとなり、多くの取り組みから1つを選ぶという必然性が生じた。その結果、「佐賀市が優先すべき取り組みは何か考えよう」という論題を児童とともに設定した。

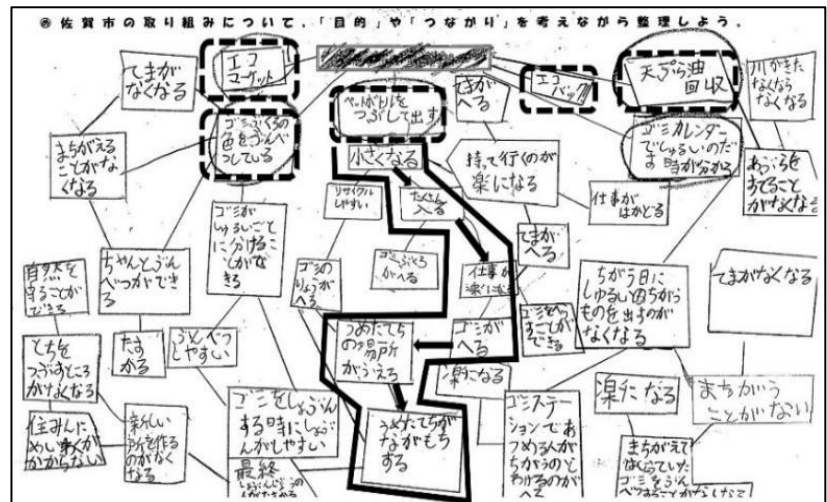


図3 佐賀市の取り組みの整理

継続性・費用などの社会的事象の見方を働かせながらつなぐように促したことで、効果を可視化することができた。次に、整理されたものを見ながら「多くの取り組みがなされているが、どの取り組みを家族や佐賀市民に勧めていくか」と尋ねた。調べ活動の資料として渡していた保護者アンケートの結果から、約半数が佐賀市の取り組みを知らないことや、知っていても面倒に感じていることが分かっていたので、「どれも大事だが、何か1つをしっかりと取り組んでもらうのがいいのでは」という話し合いとなり、多くの取り組みから1つを選ぶという必然性が生じた。その結果、「佐賀市が優先すべき取り組みは何か考えよう」という論題を児童とともに設定した。

しかし、現在の佐賀市の取り組みを全て取り上げると数が多く判断が難しいので、社会的事象の見方を基に児童が選択した上位3つを候補として、佐賀市の取り組みの優先順位について議論することとした(図4)。以上のように、佐賀市の取り組みの

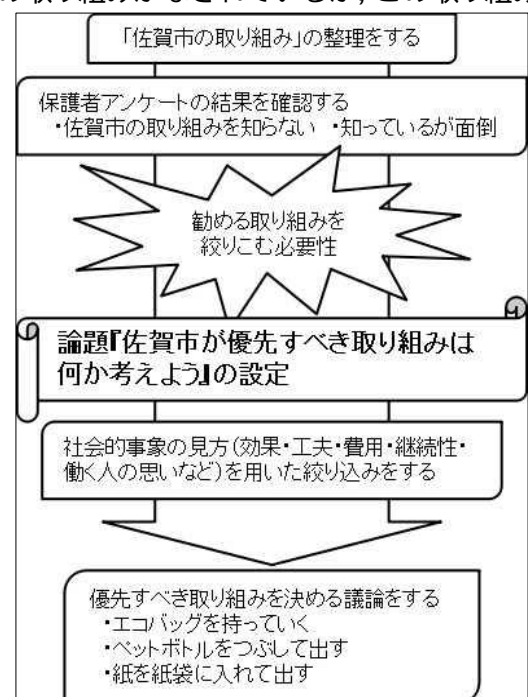


図4 論題の設定と議論までの流れ

全体像をつかませ、社会的事象の見方を働かせながら選択・判断させたり、保護者の意識を基に何が取り組みやすいのかを考えさせたりする手立てを取ることで、必然性を感じながら議論に向かうことができた。

イ 議論のコーディネート

議論では、多面的・多角的に考察していけるよう、議論の最初に「意見を述べる時に気を付けてほしいこと」として提示した(図5①見方・考え方の提示)。議論が始まってからは、理由が曖昧な場合には根拠を尋ねる(図5②根拠を問う)、社会的事象の見方を基に議論の整理をする(図5③議論の整理)など、議論が深まるように意図しながらコーディネートを行った。また、論点がずれかけてきた時、教師が修正するのではなく、C5やC7の発言を基に、出された意見の価値付けをすることによって(図5④価値付け)、議論すべきことは何かを確認しながら進めた。

このように、必要に応じて教師が声かけをして議論の方向付けをすることで、児童は、これまでの学習で使った資料を基に、効果・効率・働く人の思い・取り組みやすさなどの社会的事象の見方(図5点線囲み部)を用いて自分の意見を述べることができた。

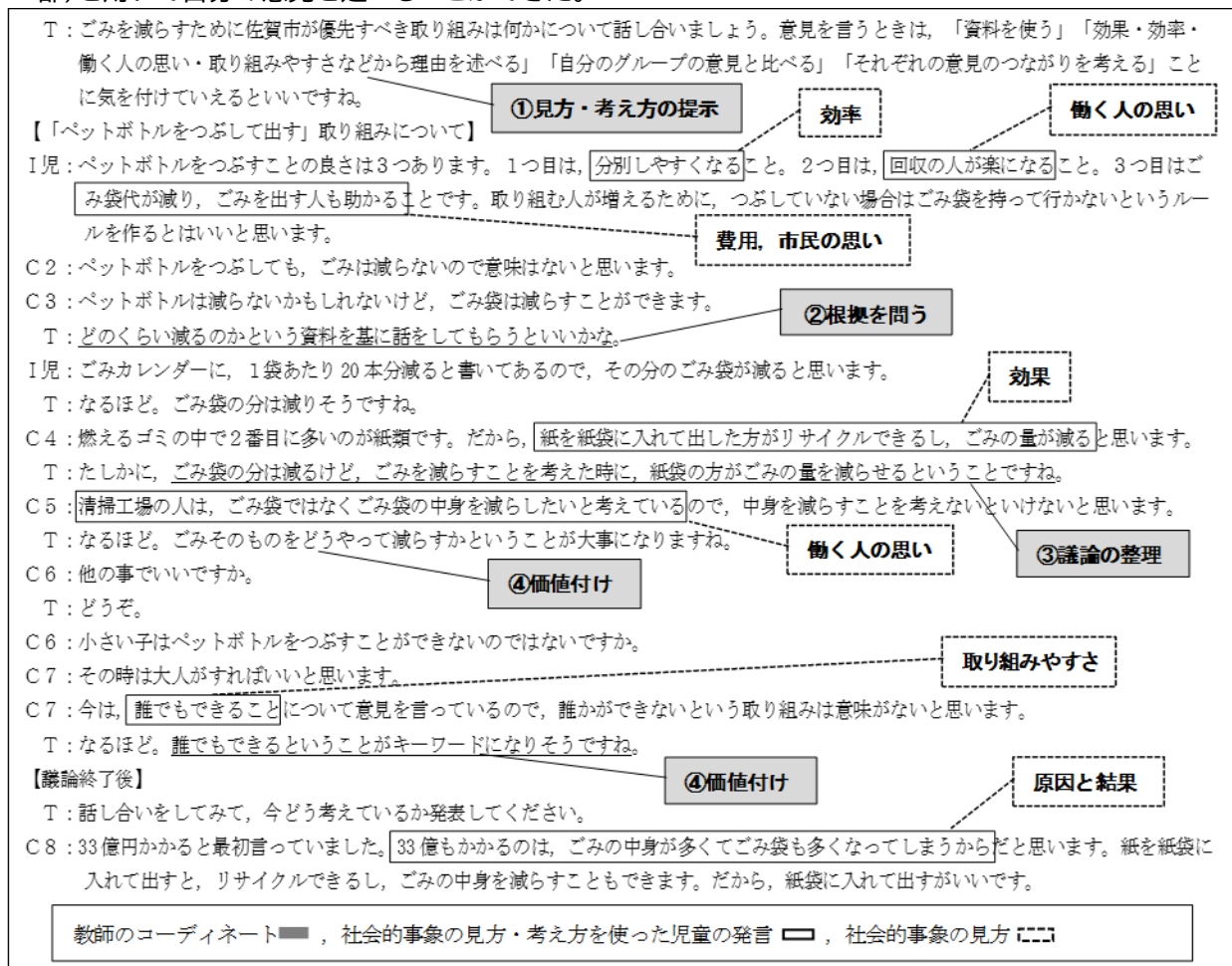


図5 議論と教師のコーディネートの様子

④ 振り返りと評価について

振り返りの記述から学びの様相について述べていく。

表1 抽出児のプロフィール

K児	I児
授業中の発言は少なく、自分の考えをまとめることが苦手で、記述にも時間がかかる。これまでの授業や、日々の生活で取り上げてきた社会問題に対する関心はあまり高くない。	授業中は、積極的に発言する。自分の考えを理由を明らかにして述べたり記述したりできる。これまでの授業や、日々の生活で取り上げてきた社会問題に対する関心は高く、ニュースなどもよく見ている。

表2 1～3時目における抽出児の振り返り

	K児	I児
1時目	<u>ごみがどうやって処分されるのか</u> が疑問に思いました。いろんな方法があるけど、 <u>どんな方法で処分するのか調べてみたい</u> と思いました。また、 <u>直接ごみ処理場に行って、そこで働いている人に聞いてみたい</u> です。	なぜ、ごみ処理で 33 億円になるのか考えたとき、 <u>やっぱり土地代だと考えたけど、友達の考えもいいな</u> と思いました。
2時目	<u>いらぬ物を減らしたり、自分からごみ拾いをしたりしよう</u> と思いました。 <u>これから頑張ってみよう</u> と思います。	ごみを減らさないと、 <u>どんどん増えて 33 億円どころじゃなくなるので、まずは家族に伝えて、少しずつ減らしていこう</u> と思いました。
3時目	自分たちでチラシや新聞を作りたいと思いました。なぜなら、 <u>チラシなどを作ることで一人でも協力してくれると思ったから</u> です。 <u>今度の授業で作りたい</u> です。	佐賀新聞の投書に載せる文を書くために <u>頑張って調べていこう</u> と思います。

1時目では「ごみ処理費用の多さ」に驚き、「大量のごみの処理方法」に関心をもち(表2波線部)、2時目では、自分もごみを減らしていこうとする意欲が高まった(表2下線部)ことが分かる。ただ、この時点での考えは漠然としたものであり、自分自身の行動にとどまるものであった。3時目では、ごみ減量の効果を高めるために広く佐賀市民に伝える必要性があることを感じ、その具体策について考えた(表2網掛け部)ことが読み取れる。つまり、単元の「つかむ段階」において、社会問題に関わる事実を提示し、児童の思いを基に学習計画を立てることは、自分事として社会的問題解決を実践していくうえで有効な手立てだといえる。3時目までに立てた学習計画にもとづき、4時目以降は調べ学習を行った。教科書で佐賀市のことが取り上げられているので、調べ活動は主に教科書を使用した。

表3 4～7時目における抽出児の振り返り

	K児	I児
4時目	私が今日驚いたことがあります。それは、燃えるごみの中身は調理くずや食べ残しが多いということです。私を含めて、 <u>たくさんの人達が食べ物を粗末にしていることが分かりました</u> 。これからは、 <u>なるべく好き嫌い関係なく食べよう</u> と思いました。 <u>何でも食べられるように、何かしらの工夫をして、好き嫌いをなく美味しく食べたい</u> です。	僕は今日の勉強で、調理くずや食べ残し等が燃えるごみの中でとても多いということを知り、 <u>僕はご飯を残すことがあるので、残さず食べよう</u> と思いました。
5時目	今日、ごみがどうやってごみ処理場まで行くかを調べました。 <u>今度は、どこにごみ処理場があるのかを突き止めて、ごみのことについて聞きたい</u> です。	僕はこの時間で、 <u>ごみを出す場所やその後が気になりました</u> 。例えば、 <u>ごみ処理場以外で、僕は埋め立て地やリサイクルセンターに行くのではないかと考えました</u> 。次の時間で、 <u>そのことについて調べたい</u> です。
6時目	私は、ごみを減らすことでおじさん達も楽になってほしいと思いました。なぜなら、 <u>雨の日にごみを回収するのは気持ちが悪いと思うから、ごみを減らしたい</u> と思いました。	僕は、ごみが一日 200 トンも燃やすのがとてもビックリしました。今度、 <u>それについて詳しく調べていきたい</u> と思いました。
7時目	今日、昔のごみ処理のやり方を聞いてびっくりしました。なぜなら、 <u>コンポスターの中にごみを入れていたから</u> です。私のおじいちゃんの家にもコンポスターがあります。おじいちゃんが畑の野菜のごみなどを入れています。 <u>いつから清掃工場で処分されるようになったのか、変化を知りたい</u> です。	僕は、後 30 年で最終処分場の第三工区がなくなることを知りびっくりしました。 <u>そのことについても詳しく調べたい</u> です。

調べ学習を通して、ごみの種類別の割合と自分たちの食生活との関連に目を向け、自分にできることを考えている(表3二重下線部)ことが分かる。また、働く人のためにもごみを減らさなければいけないことを感じたり(表3K児6時)、新たな疑問をもったりした(表3波線部)ことが分かる。さらに、I児は最終処分場の様子を知ること、ごみの現状に対する危機意識が高まった様子が読み取れる(表3網掛け部)。

議論に臨むにあたり、佐賀市が優先して取り組むべきものとして、抽出児の2名は以下のように考えていた。

表4 議論前の抽出児の考え(波線部…根拠 下線部…社会的事象の見方)

K児	I児
エコバッグを持って行くのがいいです。なぜなら、 <u>ペットボトルを潰して出すことや、紙を紙袋に入れて出すことは、小さな子ではできないから</u> です。でも、 <u>エコバッグなら小さな子でも持つことができるし、ポイントなどを付けるといった工夫をすれば、喜んで使ってもらうことができます</u> 。 <u>エコバッグはエコなので、少しもムダにならないし、便利な物に変わる</u> ので、エコバッグがいいと思います。	ペットボトルを潰して出す。理由は、 <u>ゴミ袋を減らせるから</u> です。それに、 <u>誰でも簡単に潰すことができるから</u> 。他にも、 <u>子どもは楽しい遊び感覚で潰してもいいから</u> です。

2名とも、調べ活動で分かったことを根拠として考えを述べている(表4波線部)ことや、「取り組みやすさ」「効果」など社会的事象の見方を用いて考えている(表4下線部)ことが読み取れる。

表5 佐賀新聞への投書(波線部…根拠 下線部…社会的事象の見方)

K児	I児
佐賀市の年間のごみ処理費用を知っていますか。なんと 33 億円もかかっているそうです。33 億円あれば、学校の体育館が8つできるそうです。私たちの生活から多くのごみが出ることで、佐賀市の最終処分場があと 30 年ほどで満杯になるそうです。新しく処分場を作るには、広い場所、お金、周りに住んでいる人の理解など、様々な環境を整える必要があります。だから、新しく作るの簡単ではありません。そこで、私たちはごみを減らす方法を考えました。一つ目は、買い物にエコバックを持って行くことです。多くの人がエコバックを使うようになると、ビニール袋を減らすことができます。二つ目は、ペットボトルを減らす方法です。すぐにペットボトルのお茶やジュースを買うのではなく、なるべく水筒を持ち歩くことで、ペットボトルのごみが減ります。このようなことを私たち一人一人が意識していくことで、ごみの量も少しずつ減らすことができるのではないのでしょうか。みなさんも、ぜひごみを減らす取り組みに協力してください。	みなさん、今、佐賀市が危ないのです。佐賀市のごみ処理にかかるお金が年間 33 億円とされています。僕たちは、そのことを知りとてもびっくりしました。33 億円というのがこのまま続いていくと、佐賀市の最終処分場は 30 年ほどでなくなり、新しい場所を探さないといけません。放っておくとごみが大変なことになりますが、今のような場所が見つからないので、みなさんと一緒にごみを減らすことがとても大事なことです。「とにかくごみをいっぱい減らして」と言われてもできません。だから、少しずつでも減らしていくために、僕たちはいろいろなことを話し合い、どれがいいか考えました。紙を紙袋に入れて資源ごみとして出し、紙をリサイクルしてごみを減らすこと。ペットボトルをつぶして出し、ごみ袋の枚数を減らすこと。エコバックを持って行くことで、ビニール袋の分のごみを減らすこと。みなさん、このようにごみを減らすことで佐賀市の最終処分場を守り、みんなで佐賀市の未来を守って、みんなで幸せに暮らせるようにがんばりましょう。

K児は、考えをまとめることを苦手としていたが、最終処分場に関して複数の社会的事象の見方を基に考えたり(表5K児下線部)、取り組みの効果についてふれたり(表5K児波線部)することができている。I児は、ごみの総量を減らすことが最終処分場の維持につながり、それが佐賀市の未来を守ることになるなど、新しい土地を探す難しさや、将来を見越して生活することの大切さにふれながら自分の考えを述べている(表5I児下線部)。

これらのことから、本単元で行った議論が児童にとって自分事として選択・判断できる論題であったとともに、社会的事象の見方や考え方を用いて試行錯誤する場であったといえる。

ここからは、「家庭での様子について保護者から寄せられた感想」「自分事としての意識に関するアンケートの考察」「佐賀新聞への投書の考察」を基に、手立ての有効性について述べる。

表6 保護者からの感想

K児の保護者	I児の保護者
「このごみは、どの種類に分けられるの?」と尋ねたり、自分でごみステーションにごみを持って行ってくれたり、ニュース番組でごみ関係があると熱心に見たりと意識が高まったように思います。	授業でごみの学習に取り組むようになってから、息子の関心は非常に高く、買い物の際も資源ごみや可燃、不燃ごみについても私がどのように処理しているのか詳しく話し、日々の会話がごみの話中心という感じになりました。一つ一つの取り組みに、本人はもちろんの事、親も一緒に真剣になりました。

日常生活においてもごみに関心をもち、自ら関わろうとしていること(表6波線部)が読み取れる。つまり、ごみ問題を自分事としてとらえ、主体的に市民社会に参加しようとしているといえる。

⑤ 学級全体の学習の様相

ア 自分事としての意識に関するアンケートの考察

「自分事としての意識がどの程度あったか」という問いに対して5段階で自己評価させた結果が図6である。学習前に4と回答した児童が3名(8%)、5と回答した児童が0名に対し、学習問題を作った後(3時目)では、4と回答した児童が18名(51%)、5と回答した児童が6

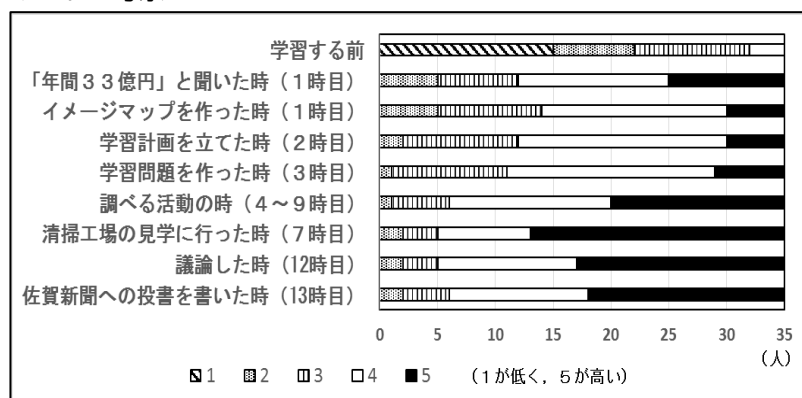


図6 単元全体における自分事の意識の変容

名(17%)となり、「つかむ段階」の学習を通して自分事の意識が高まったことが分かる。また、調べ活動で最終処分場の現状や、清掃工場に運ばれるごみの多さを知り、ごみをどうにかして減らさないと大変なことになると実感したことで、自分事の意識が高まったことも読み取れる。さらに、佐賀新聞への投書を書いた時に4・5と回答した児童が30人(85%)を超えていることから、単元を通して自分事の意識が継続されていることが分かる。

イ 佐賀新聞への投書の考察

佐賀新聞への投書について、記述内容をループリックを基に評価をおこなったのが表7である。根拠として「年間のごみ処理費用」「種類別ごみ処理費用」「最終処分場の現状」に関する資料を基に述べている児童が多かった。これらの事実を知って「どうにかしなければ」と強く感じたことの表れだといえる。また、多くの児童が自分の考えを複数の社会的事象の見方から述べるができていた。「つかむ段階」で感じた「多くの市民に伝えなければ」ということを意識し、説得力をもたせるためにどうすればいいか考えながら書いたことの表れだといえる。

表7 佐賀新聞への投書の評価

	根拠の明確さ	社会的事象の見方の数
3	30人(87%) 【K児・I児】	29人(83%) 【K児・I児】
2	3人(8%)	6人(17%)
1	2人(5%)	0人(0%)

4. ICT活用について

電子黒板とタブレット端末は、それぞれによさがある。そのよさを最大限に引き出すのが双方向性を生かした授業ではないだろうか。そのよさについて事例を含めて紹介したい。

双方向性を生かすことで、次の2つのことを期待している。

- ① 学びの質の向上 ② 効率化

この2つのことが児童の資質・能力を育んだり鍛えたりすることにつながると考える。

授業例1

教師がデジタル教科書に記載してある「長篠合戦図屏風」を児童が持っているタブレットと端末に配布し、それに気付きをかき込んでいる様子が写真1である。電子黒板上では、児童のかき込みの様子が4人ずつ10秒程度で切り替わるように教師が意図的に設定しており、かき込みが進まない児童が他の児童の考えを知ることができるようにしている。また、気付きを学級全体で共有するときには、電子黒板上の画面をタップすることでその児童の画面が拡大され、その画面を使いながら説明できることは、話す側・聞く側どちらも視覚的で分かりやすい。



写真1

このような状況を容易に仕組めるのは、電子黒板支援用ソフトウェアの活用ができているからである。もし、それがなければ、「長篠合戦図屏風」をカラーコピーして児童に配布したり、かき込んだものを共有するために書画カメラで提示したりすることになる。

授業例2

児童がタブレット端末のカメラ機能で自分の考え(ノートなど)を撮影し、それを教師ヘデータで提出した後、比較している児童の様子が写真2である。写真2のように、児童全員分を俯瞰的に見て全体的な傾向を掴んだり、2人分を取り出して見て共通点や相違点を見出したり、授業の前と後で是非の変化を考えたりするなど、思考場面を多岐に仕組むことができる。



写真 2

授業例3

写真3は、タブレット端末のアンケート機能を使って児童が回答し、それが集約されて電子黒板上に反映されているものである。児童の実態把握や賛成の数など、様々な学習場面で活用できることが考えられる。教師が紙でアンケートを取って集約しグラフで提示するという手間が省ける。様々な機能が効率化につながっている。



写真 3

授業例4

論理的思考力が育つプレゼン。プレゼンソフトを使って準備するのが好きな児童は多い。「ノートや画用紙に書くことと違って、間違ってもすぐ消すことができるし、字の配置や大きさを後からでも変えることができる」「写真などの資料を挿入できたり、その写真を加工することで自分なりの資料を作成したりできる」「アニメーションを付けることで話す順番を意識できたり、言いたいことを強調できたりする」などの理由が挙げられる。写真4は、タブレット端末で作成したプレゼンを電子黒板上で披露している児童の様子である。友達に自分の考えを分かってもらえるように、プレゼンを何度も作りかえたり、話す練習をしたりする姿が休み時間にも見られたことは、手元にタブレット端末があったことや意欲が続いていることが要因ではないだろうか。



写真 4

その他

写真5は、児童が授業後に教師の板書を撮影し、自分のフォルダに保存している様子である。このように、児童は自分の学びの蓄積ができる。この蓄積は、家庭学習等にも活用できる。例えば、「家の近くの目立つ建物は何か」という課題が出たときに、タブレット端末だとカメラ機能を用いて多くのものを探し出して撮影して



写真 5

くる。紙にかいてくる課題だと、建物の名前や図になる。実際に、そのような課題を出したところ、カメラ機能を用いて撮影する課題の方が、量が多く、児童の学習時間も長かった。意欲面でもタブレット端末の方が持続しやすいことが分かる。そして、その課題を学校で提出し、その提出されたものを授業で扱うことが可能となる。学びの連鎖が生まれるのである。